

卯月紺

帰りたくない。バイト帰りのバスから降りた瞬間、直はそう思った。一番近いバス停からアパートまで、寂れた商店街を突っ切って三十分以上。今日は長引いたため最終のバスに乗ったから、現在時刻は午後十一時手前。前方には、街灯の少ないぼんやりとした暗闇。

……ここからの帰り道を考えると、本当に帰りたくなかった。

前にも何度かこんなことがあった。中学高校の時も、家で何かあったわけでもないのに無性に帰るのを拒みたくない時があった。まあ、結局親の庇護下にいる未成年の自分は、家に帰る以外の選択肢はなかったわけで。せいぜい、閉館近い図書館に少し立ち寄ってから、帰るという方法で誤魔化すくらいだった。

幸い、今の直は成人済みで一人暮らし。帰らなかったところでは何の問題もない。

そして、明日は授業もバイトもない土曜日。決めた、帰らずにこのままどこかで過ごそう。

「どこで？」

そこまで考えて、直はぼつりと呟いた。

この辺に深夜まで開いているお店は少ない。コンビニは少々遠いし、あまり長時間いられない。

とりあえず歩こう。商店街の暗がりを抜ければ、少しお店のある場所があったはずだ。

パタパタと、静かなシャッター通りに靴音が響く。すっかり暑くなり、夜の空気はまだ少し湿り気を帯びている。

喉が、乾いているのにべっとりとした感じがした。

「あれ？」

もう少しで商店街を抜けるという距離で、一つの建物から明かりが漏れているのに気づいた。確か、あそこは古い個人経営の映画館だったはずだ。

こんな時間に開いているのか。もしかしたら、ミッドナイトショーかもしれない。

「そうだったら、嬉しいな」

映画なら、だいたい二時間は過ごせる。それに直は映画

が好きだ。しかし、最近はずいぶん忙しくて映画館に行けていない。ふらりと、明かりが漏れる中を覗き込んだ。受付には人がいる。おそらく男。うつむいていて、顔は……

「あつ」

目が合った。不意に顔を上げた彼は、直に気づいてキョトリとした。大きな目を見開いた顔は、自分よりも年下に、高校生くらいに見え、戸惑った。

「えつと、あー……」

どうしよう。入ろうか？

彼を見ると、こちらに向かつてチョイチョイと手招きしている。入ってもいいようだ。

そつと入ると、彼は何か探すように受付の下で手を動かしながら直に声をかけた。

「こんばんは」

「へつ、あつ、こんばんは……」

「こんな時間に珍しいお客さんだね。大学生？」

「あつ、はい。ところで君は……」

「俺はこの映画館の持ち主の親戚。ここでバイトしてて、たまに夜中に好きな映画を見せてもらってる。あと、多分

勘違いしてると思うけど、未成年じゃないよ。二十一歳」

「えつ、ごめ……いや、すみません」

自分より一つ上ということに驚き、思わず敬語になった。

「いいよ、よくあるし。それから、敬語もいい」

彼は、受付の下から見つけた小さなメモに何か書くと、直に渡した。やや角ばった文字で、「特別上映 五百円」と書かれている。

「ところで、これから、お気に入りの映画を上映しようと思ってたんだけど、一緒に見る？」

「えつと、いいんですか？」

「いいよ。いつも一人で見てたけど、たまにはお客さんがいるのも良さそうだし。それに、こんな時間に寄ってくる人ってさ」

帰りたくないのかもしれないし。

どきりとした。なぜ、そんなことが分かったのだろうか？

彼は、そんな直にそれ以上何も言わず、映画館でよく見るカップを取り出した。

「その料金、ドリンク込みだから。何がいい？」

「あつ、じゃあコーラを」

「コーラね。アルコールは？ ブランデー混ぜることもできるけど」

「いや、アルコールはちよつと……」

別に飲めないわけではないが、まだ怖くて、少ししか飲もうと思わない。

「ん、わかった」

彼は二つあるカップの片方に、そのままコーラを注ぎ、もう片方にはコーラと一緒に濃い褐色の液体を注いだ。

コーラだけの方を、直に渡す。ブランデー入りは彼のもののようだ。

「シアタールーム 001、一番奥の部屋で待ってて。用意できたら俺も行くから」

そう言って、彼は奥の部屋に、上映の準備に行った。

暗い廊下の、奥の部屋。シアタールーム 001は、直の知っているシアターよりこじんまりとしていた。中は、ひんやりとしている。真ん中の、画面に近すぎも、遠すぎもしない席に座った。

徐々に、周りが暗くなる。この時間は、案外好きだ。「日常」の中にいながら、そこから切り離されるようなこの時間が。

ジジツという音がして、画面が動き出す。

始まった。

黒いワンピースを着た女性が、何か食べながら歩いている。確かこの映画は……

「知ってる？」

彼が、隣に座っていた。

「ええ。有名な映画だし。それにこの女優さん、好きです」

今もなお有名な彼女は、綺麗というよりも、かわいいというよりも、キュートというのにふさわしい笑みでこちらを見ている。

「君とは趣味が合いそうだね。俺は、この映画に出てくる猫も好きなんだ」

「いい猫ですよね。もしできるなら、助演動物賞をあげたい」

「それは、いいね。普通に人から選ぶより楽しそうだし」
「ところで」

「ん？」

「映画鑑賞中に、話して大丈夫？」

「そりゃ普通はダメな行為だけどさ、今は二人だけだし。話が合いそうなら、俺は嫌じゃないよ」

「そっか……」

「ところで、今回はラブストーリーにしたけど、君はどんな作品が好き？」

「うーん。ロードムービーとか好きかな。どこまでも行ける感じがして」

直は一つ作品名を言う。詐欺師と少女の白黒映画だ。

「一度見たことがあるよ。なかなか愉快だった」

「あれは目的地があつたけど、目的のない旅もいいよね」

「彼女も、旅をしたかったかな」

画面の彼女は、自由に振舞う。しかしその自由は、本当に求めているものか？

「まあ、彼女にしかわからないか」

彼は、直にポップコーンを差し出した。食べていいらしい。しょっぱいそれを一粒、それからコーラ。定番の、チープな組み合わせだが、やっぱりおいしい。

それから、ポツポツと、言葉を交わしながら映画を見た。時間が経つにつれ、体が少し冷えてきた。

「はい」

彼がブランケットを渡してきた。

「結構冷えるよね。ちよつと調節きかないから、これ使つてよ」

「あつ、どうも」

膝にブランケットをかけて、こすっていると温くなった。きた。

映画は最後の場面になる。寒そうな雨のシーン。

小さな雨音から、この映画のテーマ曲に変わる。

甘やかな、ゆったりした歌声が、脳に染み込む。

直のまぶたは、ゆつくりと下がっていった……

甘い香りが鼻をくすぐる。目を開けると、一人暮らし位のアパートではなかったため、一瞬慌てる。

すぐに昨日のことを思い出し、伸びをした。ずっと座っていたから、体が硬くなっている。首元まで上げられたブランケットは、彼がしたのである。

「おはよう。よく寝てたね」

はい、コーヒー。

彼は熱いコーヒーと、甘い香りの元が入ったカップを直に渡した。

苦味で、目が覚める。もう一つのカップには卵色の小さくカットされた食パンが入っていた。

「パンプディング。好んで蜂蜜かけるといいよ」

「フレンチトーストとは違うのか？」

「さあ？ よくわかんないけど、フライパンで作ったら、フレンチトースト。オーブン使ったらパンプディングだと思ってる」

蜂蜜を少し垂らして、食べる。

甘くて、柔らかいパンが口の中できちんととろける。

直は、何も言わずに完食した。

コーヒーを飲んで、ほっと息をつく。

「うまかった。ありがとう」

「そりゃよかった。もう一杯飲む？」

「いや、そろそろ帰るよ」

昨晚の気持ちは落ち着いたのか、今は、部屋に戻ってもいいなと思えた。今は旅に出たい時ではない。

「そっか。また来なくなったらおいでよ」

「えっ？」

「君となら、隣の席にいても悪くないからね。帰りたくないときは、いつでも来なよ」

「……うん。そうするよ」

帰りたくない日の、別の場所。シアタールーム001はそんな場所になりそうだ。

「ちなみに次の上映予定は、君の言っていた詐欺師と女の子の映画だけど……どうかな？」

「……最高！」

外に出ると、朝日がきらめいていた。

今日も歩くなりそうだった。

終わり

参考映画

- ・ 本日の上映……「ティファニーで朝食を」
- ・ 次回の上映……「ペーパームーン」